



## ワールド・シアター・デイ 2018

それは交流、またとない出会いの機会。他の世俗的な活動にはないもの。人々が共通の経験をするために同じ場所、同じ時に集まるというシンプルな行動。個人が共同体となってアイデアを共有し、必要な行動の負担を分け合う方法を思い描くよう促す……。そしてゆっくりと人間同士のつながりを取り戻し、相違点ではなく類似性を見つける。ここでは特定のストーリーが普遍性を追い求めることができる……。ここに演劇の魔法がある。表現によって、失われたものが取り戻されるのだ。

他者に対する恐れや孤立、孤独が世界に広がる中で、今この場に本能的に共にいることは愛の行為だ。極めて消費主義的であくせくしたこの社会で、一時の快楽や個人の自己中心主義から離れ、ペースを落とし、熟考し、共に内省することは、政治的な行為であり寛容な行為だ。

主要なイデオロギーが崩壊し、世界秩序が10年ごとに破綻を繰り返す中で、私たちはどうやって未来を再び描くことができるだろう？ 主要な言説では安全性と快適性に関心が集まり、優先される今、それでも私たちは不快な議論に参加することができるだろうか？ 自分たちの特権を失うことを恐れずに、危険な領域に足を踏み入れることができるだろうか？

今日では、知識よりも情報のスピードが重要で、言葉よりもスローガンに価値があり、実際の人間の肉体よりも死体のイメージが崇められている。演劇は、私たちが血と肉でできていること、私たちの肉体には重みがあることを思い出させてくれる。私たちのすべての感覚を呼び覚まし、視覚だけを頼りに理解、消費する必要はないと教えてくれる。演劇は言葉の力と価値を取り戻し、対話を政治家のもとから正しい場所へと返す……。アイデアと討論、共通のビジョンの場へと。

物語を語る力と想像力を通して、演劇は私たちに世界と他者に対する新しい視点を与えてくれる。不寛容さについての圧倒的な無知がはびこる中で、考えを共有する場を切り開いてくれる。外国人嫌悪やヘイトスピーチ、白人至上主義が恥ずべきこと、容認できないこととされるべく、世界中の大勢の人々が長年尽力し、犠牲になりながらも、それらはいとも簡単にまた表面化している。10代の少年少女は、不正や人種隔離政策を拒否して頭を撃たれ、投獄され、一部の主要先進国では狂気に走った人物や右派による専制支配が行われている。核戦争は、権力を握った幼稚な人々間のバーチャルゲームとして迫りつつある。移動することが選ばれた少数の人にます

まず制限されていく一方、難民たちは幻の夢の地に渡ろうとして海で命を落とし、多額の費用をかけて壁が次々と建設されている。多くのメディアが買収された今、私たちはこの世界の問題をどこで取り上げることができるだろう？ 私たちが愛と慈悲に基づき、知性とたくましさ、強さを持って建設的な議論をし、人間のありようを再考し、新しい世界秩序を想像する場が、人々の集う演劇の場以外にあるだろうか。

アラブ地域出身者である私は、作品をつくる上で芸術家が直面する困難を語ることもできた。しかし、私は、破壊すべき壁が常に見えていたことを、恵まれていると感じる世代の演劇人だ。それによって私たちは、手に入れられるものを変化させ、協働と革新を限界まで推し進めることを学んだ。私たちは地下で、屋根の上で、リビングルームで、路地で、そして路上で演劇を作り、訪れる都市、村、そして難民キャンプで観客を増やしていった。私たちは一線を越え、タブーに抵抗しながら、文脈をゼロから作りあげ、検閲を切り抜ける術を身につけることができた。かつてなく資金が乏しく、ポリティカルコレクトネスが新たに検閲を担っている今、世界のすべての演劇人がこの壁に直面している。

急増する有形無形の壁に立ち向かうため、世界規模の演劇コミュニティにはこれまで以上に、団体としての役割が求められている。今日のはかつてなく、誠実さと勇敢さを持って社会的、政治的な構造を創造的に立て直す必要に迫られている。私たちの欠点と対峙し、私たちが作る世界に対する責任を負わなければならない。世界の演劇人として、私たちはひとつのイデオロギーやひとつの信念体系に従うことはない。しかし、私たちは皆、あらゆる形態の真実を永遠に探し求め、現状に疑問を投げ掛け続け、抑圧的な権力システムに抵抗し、そして人間としての品格を持っている。

私たちは大勢で、恐れを知らず、そして存在し続けるのだ！

## **Maya Zbib**

### **マヤ・ズビブ**

演出家、パフォーマー、劇作家、ズウカック劇団 (Zoukak Theatre Company) 共同創設者。手がけた作品は中東、欧州、米国、アフリカ、南米、南アジアで公演。世界各地の研究機関等で演劇を教えている。

2007年にロンドン大学ゴールドスミスカレッジを卒業、英国外務省チーフニング奨学金・KRSF 奨学金 (カリム・リダ・サイード財団) を取得。2010年、ブリティッシュ・カウンシルのカルチュラル・リーダーシップ・インターナショナルに参加し、ニューヨーク・ISPAの奨学金を取得。

イスラエルのレバノン侵攻があった 2006 年、学校に避難した子供や女性に対し、演劇療法を用いて社会心理的な支援活動を始め、バイルートでズウカック劇団を設立。ニューヨーク大学アブダビ校パフォーマンス・アーツ・センター、ヒューストン大学、ウィリアムズ大学、クレーフェルト＝メンヒェングラートバッハ市立劇場、シュヴィンデルフライ演劇祭（マンハイム）、LIFT（ロンドン国際演劇祭）、ロイヤル・コート・シアターなどの委託を受けて作品を制作している。

2011 年には「ロレックス・メンター・アンド・プロテジェ・アーツ・イニシアティブ」に選出、アメリカの演出家ピーター・セラーズの下で学ぶ。2012 年、イブセン・スカラシップを授与され、2014 年にはアナ・リンド財団のユーロメッド・ダイアログ・アワード、2017 年にはシラク財団の「平和の文化」賞を受賞している。ズウカック劇団は 2017 年、日本美術協会による高松宮殿下記念世界文化賞の一環である「若手芸術家奨励制度」に選出された。

翻訳: 前田雅子

Translation: Masako MAEDA